アメリカ一人旅

思い切ってフロリダ

Dec 22 ’07 ～ Jan. 01 ‘08

一日目　リンカーン　から　セントルイスまで

誰もが、キーウェストと聞けば、一度は行って見たいという。どんなところかって詳しく知らない人でも、あの海の上に延々と続く端の写真は一度は見たことがあるかもしれない。フロリダの南端からカリブ海に延びるさんご礁の島が連続した国立公園である。アメリカの南端でもあり、まさしく南の天国のようなところというイメージだ。アメリカの大陸をできるだけ自分の目で確かめて歩きたいとのこだわりから、今年の冬のシャットダウンがすこし長かったこともあり、思い切りアメリカの真ん中から、南東でのはずれまで尋ねてみることにした。カリブ海といえば、カリブの海賊「パイレーツ」が人気をよんでいるし、これは私のアメリカ暮らしのひとつの勲章になるのではとの下心もすこし働いた。

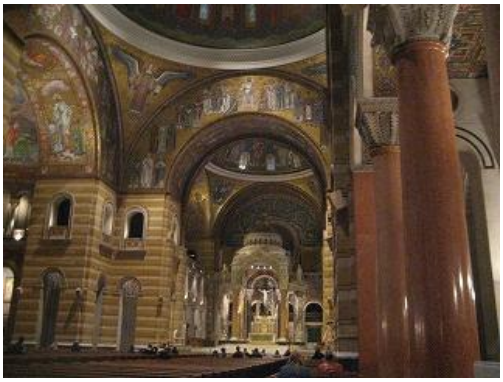
問題は、今年、この時期やたらとスノーストームが襲ってくること。しかも、アリゾナからカンザス、そして、ミズーリイリノイ、と斜めに雪を土産にする冬の嵐である。ネブラスカから、フロリダまでとなるとどんなことあっても、これと交差をしなければならないこと。問題は、雪のなかか、フリーズドレインか、それとも、運がよければ雨で済む。一番怖いのが、フリーズドレイン。これは、地表が氷点下のところに過冷却された雨がふり、道路が一瞬のうちにスケートリンクの状態になる。この状態では、時速が五マイルくらいでも、ハンドルがぜんぜん聞かず、惰性で何とかまっすぐ進んでいるような状態。曲がるときには、すこしハンドルを切り、車の向きが変わったら、おそるおそる加速するというような運転を強いられる。こんな経験をしたことがあるものだから、一週間前から出される天気予報には毎日神経を尖らせて聞いていたが、前日になり、出発の日の朝はネブラスカはスノーストーム、そして、なんとなんと、カンザスから、一日目の宿泊地セント・ルイスまではフリーズドレインの予測。これは、参ったという感じの出発前の晩。覚悟をきめ、とりあえず、時間をかけてゆけるところまで行くかと居直り気分であった。

が、外れることの少ないこちらの天気予報が、なんと幸運なことか、ネブラスカは雪といっていたのに、冷たい強風が吹いているだけ。流石に気温は零下数度というところであったが道路は乾いているので、これなら何とかなりそう。問題はカンザスだが、これで大助かり。よていどおりネプラスかシティまでの 2 号線はできるだけ人の後に続くようにして、こわごわの 60 マイルで突っ走る。こうして、カンザスまでは、冷たい風だけの状況で、しめしめという内心、してやったりの気分。これなら、そう遅くならずにセントルイスま

でいけるのではと予測。しかも、ネブラスカでは零下であった気温も、零度近くまで上がってきた。この温度であればフリーズドレインにはならないだろうと、もくろむ。外気温の表示が、華氏で、三十度当たりを上に行ったり、下になったりしている。と、突然、車の屋根がパタパタと音を立てだした。が、フロントガラスに雨が降ってきている様子はない。が、確かに音がしている。えっ、と思ったら、これがなんと雹である。小さいが確かに雪ではなく、もっと硬いものが車に当たっているのである。そうか、これがフリーズドレインの前触れか、と覚悟。横を走っている車も急に速度を落としている。やがて、雹は霙に変わった感じ。いよいよだ。これがどこまで続くのか。まだ、セントルイスまでは 200 マイルくらいある。が、運良く、気温がどんどん上がってきている。すでに零度以上だ。これなら、道路が凍ることはないだろう、の思いですこし気が楽になった。そんな状態で、I-70 を東に走る。走行しているうちに霙交じりの雨も小降りになり、なんとか、このストームの雲の下をくりぬけたようだ。途中、コロンビアという町、この町は大学がいくつか集まった学園都市。ここで、インターストーツを降りて、街中見物。住宅地は流石に落ち着いたこぎれいな家がたくさん並んでいる。コートハウスを見つけ、これに感心して、再び、インターステーツに乗る。外気温とにらめっこをしながらのときには緊張していたせいか、それほど感じなかったが、それが過ぎるとやはりこの高速道路は退屈だ。変化が少ないのである。それでも、カウンティではなかなか味わうことができない切通しで、アメリカ大陸の地表のすぐしたに広がる岩を見て、この大地の厳しさを再び肌で感じる。

　セントルイスには、ネブラスカに来て、アーカンソーをドライブしたときに、隣町のチャールストンに止まったことがあるが、西からアクセスするのは初めて。かって、インディアナにいたときに、ビンセンスからここを訪れ、ジョンソン大統領が建設したというゲートウェイアーチに登ったことがある。このアーチは、アメリカのここから西がフロンティアの地だということで、この西には広大な未開の地が広がっているというそのシンボルとして立てられたものだと聞いたことがある。そのアーチを今度は、西のネブラスカから尋ねたのだから、これは、まさに私にとっては、青天の霹靂という思いだ。そんな感傷に浸りながらセントルイスに到着。ところが、やはり予定より一時間程度遅れてしまった。ちゃんと時間通りにつけば、この日は、モザイクで有名なセントルイスの大聖堂と、旧のコートハウスでも訪ねようかという目論見であった。が、天気が悪かったせいか、それはそろそろ夕暮れという感じ。何とか、大聖堂だけでもと思ってダウンタウンに入る。ここで、ナビが大活躍。その案内どおりに進み、この大都会の中でも難なく目的の場所につく。日没までが見学可能というこの大聖堂。なんと、この時間でもまだなかに入ることができる。しかも、道路に駐車してもこの大聖堂の周りは問題ないのだが、セントポールでも、大聖堂をぐるりと回ったところに見学者用の駐車場があったことを思い出し、ここでも大聖堂を一回りしたら、ちゃんと裏に駐車場があるではないか。これはしてやったりとここに車を止めたのだが、どうも、これはあとで考えたら、大聖堂の関係者たちの駐車場であったようだ。ここから、ちょうど数人の人たちが扉から出てきたので、正面の入り口では

ないが、中に入ってもよいかと聞いたら、大歓迎の様子。どうぞどうぞ、とご婦人がにこにこにしながら中に入れてくれた。となんと、この入り口、礼拝堂の祭壇の横につながっていた。これにはびっくり。こんな近くで祭壇を眺めることができるなんて。思わず恐縮。そろりそろりと礼拝堂の一番後ろまでまわる。とにかく、ここのモザイクは立派だ。あの荘厳な響きのする礼拝堂のありとあらゆるところにモザイクの絵が施されているのだ。そのモザイクの博物館が四時までという。すでに、30 分近くも過ぎているが、なんと覗いてみたら、入り口の扉が開いている。これは、ラッキーとなかに入る。が、客は私ひとり。しかも、ここは地下室。かってローマで観光したときに、「バシリカ」、つまり、これは、教会の地下にある墓地なのだが、これを思い出し、確かに、モザイクのすばらしさもさることながら、その静けさにちょっと身震いをしたというのが正直なところ。たくさんの人が一緒なら、ゆっくりと見物というところであったが、ここは、そそくさを写真を撮り退散した。そして、もう一度礼拝堂に戻り、写真を撮っていたら、突然、その部屋の照明がつき、なんとフラッシュも要らない程度に明るくなった。これは、幸運。おかげでたくさんの写真を撮ることができ、貴重なものを手に入れることができた。これも、無理をして何とかここに来ようとした思いの褒美かもしれないと一人よがりの満足。



一日目のセントルイスまでの旅でした。

この日の行程

Lincoln ---→ Nebraska City ---→ Kansas City --→ Columbia ---→ St. Louis

走った距離

460mile でした。

二日目　St¥. Louis しからチャタンヌガまで

心配された天気も朝から快晴模様。これが、日ごろの心掛けのよさというよりほかに表現の仕様があるのかと言いたいが、そこは独り言に収め、とにかく、朝方まで続いた嵐はどこに行ったのやら、最高の天気である。ただ、心がけなければならないのは、昨晩の雨が朝の気温で凍り付いていないかということ。こんな心配をしながら、ミシシッピー川ぞいのルート 3 を南に下る。このルート、シーニックドライブのコースであるだけに景色は抜群。ミシシッピー川が長い歴史の間にもたらした肥沃な大地には、これまた見事という以外にないような手入れの行き届いた農場が見渡す限り続いている。こんなに肥沃で平らな土地が手に入るのだから、ここでの商業の農業にネブラスカの農家がかなうわけがない。うらやましいことには、その農場のいたるところに水溜りがある。水が吐けずに溜まっているというのであれば、これは問題だが、水不足のところにこれだけの豊富な水があること自体がうらやましい。ネブラスカの大地を思い浮かべながらそんなことを考えていた。セントルイスから、川沿いの街道をカイロという町に向かう。

途中、水溜りのある平地がある。ここに Gaming というカンバン。つまり、ここは野鳥などの狩りをして遊ぶ、狩猟地ということ。この広大な土地に獲物を求めてハンティングをする人たち。贅沢というか、無常という感じもするが時に野鳥は農作物を荒らすから適当に捕獲しなければならないようだ。その人たちがみんな悪路で乗り回すのが、ATV。つまり、どんな地形でも走ることのできる四輪バイク。アメリカでは、このバイクを馬の代わりに乗り回すのである。その市場もなかなかのもの。とにかく、馬のように餌をやる心配はないし、馬力もなかなか、スピードもかなり出るし、若者でも自由に乗りこなせるから、結構売れているのである。そのシートを当社で製造していることもあり、こうしたことから、多少の親近感を覚えるのである。とにかく、開けた大地を走り抜けるこのドライブコースを南に南にと下る。気温も既に 0℃を越えて、かなり暖かい感じ。まどを 開ければ心地よい風が入ってくる。こんな状態で、カイロという町に到着。この町、その名前からして興味がわく。ミシシッピー川と、オハイオ川が合流するその間にできた街である。かって、インディアナにいたときに、この周辺までドライブできたことがあり、そのときに覚えた名前。実

に懐かしい。道路のガイドには、エバンスビル、サウス・ベントなど、これまた懐かしい名前が出てくる。うれしい限りだ。が、なにしろ、ここまで車で丸一日もかかるのだから、しかも、かってはルイジアナとして一緒くたにされていた開拓地、なんと田舎にいることかとの思い。

ここから、オハイオ川を渡ると思うと、いよいよ東部に来たなという気持ちになる。こちらの川は随分と水が豊富。そこをスチームボートがものすごい量の荷物を運んで往来している。川幅は 200 メートルくらいあるから、その光景に力強いものを感ずる。ところどころにダムがあるが、これは、水力発電というより、こうした水上輸送のための水路、つまり水深を確保し、船の航行の安全を計るためのようだ。以前にオハイオ川に川辺をドライブしたことがあるが、その時にこうした水上運搬で大量の石炭を運び、川から直接ベルトコンベアーで陸揚げしている火力発電所をみたことがある。こちらは、落差の小さな水力発電よりも石炭の火力発電が随分巾を利かせているようだ。

この二つの川が合流する辺り、橋を渡るごとに州がめまぐるしく変る。1 時間も走ればミズーリからアイオアに入り、ケンタッキーからテネシーに抜けてしまう。南にいけばアーカンソーだし、すこし来たに上がればインディアンという具合。そんなわけで、地図を見る間もなくケンタッキーに入ったかと思ったら、いつの間にか、テネシーのなかを走っていた。

ここに Land Between the Lakes という National Park がある。すこしくどいようだが、この Park はその名前のとおり二つの湖に囲まれた半島のような形をしたところ。片方は、テネシー川がつくった湖、そして、もう一方は、クンバーランド川がつくった湖。いずれもアパラチア山脈の北側を流れる川だが、ナシュビルあたりは後者の川沿いにある。この二つの川はそれぞれ別々にオハイオ川に合流するのだが、実は、二つの川は合流する前に水路で繋がっているのである。そして、そのオハイオ川がミシシッピー川に直ぐに合流する。こんな風に大きな川が一度に幾つも合流するこのあたりまことに変化に飛んだ地形ということ。と言うわけで、この Park の中を走っているシーニックドライブウェイを楽しんだ。この Land というのが一つの公園になっているのだが、その長さが 50 マイルくらいあり、しかも、ケンタッキーからテネシーの二つの州にま

たがっているというわけ。ここは、農場の開拓も進んでおらず、自然がそのまま公園になっていた、増さして動物達の天国。とりわけバードウォッチングが盛んのようで、此処でしか見られない珍しい野鳥が観察されるとのこと。野鳥の森という感じ。だが、その広さが違う。とにかく通り抜けるのに 1 時間以上かかるのである。

林の中を少しだけ小鳥達に遠慮しながら、滑るように飛ばす。途中のバイソンの牧場に出会う。たくさんのバイソンが草を食んでいる。「おっ、これはラッキー」と思いきや、「あまり近寄らないように」の注意書きの看板をみた時には、その姿が迫力あるだけに、内心、どきりと緊張。でも、ここで写真を撮らないわけにはいかない。お気に入りのカウボーイハットをかぶり、恐る恐る大写しで一枚。

この National Park を抜けるとすでにテネシー州である。いよいよ南に来たなという感じ。その印象を寄り一層強固にさせてくれたのが、Fort Donelson の National Park。ここは、クンバーランド川の南に位置し、南北戦争のときに南軍の砦があったところ。ここを St. Louis、ピッツバーグ、ルイビルあたりから着た北軍が激しく攻撃したらしい。南北戦争の勝敗を決するような大きな戦いがあったようだ。砦は、今全体が公園になっているが、そのいたるところにまだ当時備え付けられた大砲が川に向って照準を合わせており、当時の戦いの後が生々しい。ビジターセンターでは、南の地方で使われていた貨幣、南軍が着用していた、軍帽、軍服、サーベル、軍旗、その他もろもろ、歴史的にまだそう遠い昔のことではない記念品が沢山展示されており、また、この砦の活躍の記録映画が紹介されていた。係員が他の客にしきりに解説をしていたが、話の内容は分らないにしても、彼らの先祖である南軍は、いまだ、南北戦争は負けてはいないというような意気込みを感じた。

ナッシュビルから二十四号線を走るがここで初めて、高速の渋滞に遭遇。ほんの二十分程度であったが、これがまた、実に長く感じた。なんと渋滞の原因は反対車線の事故処理。みんながこれを見ながら走るので、渋滞したというわけ。それくらい、ハイウェイが混んでいた。ネブラスカでは考えられない。

ナッシュビルからチャタンヌーガまで、時間があれば遠回りをする予定だったが、とてもそんな時間的余裕はなく、なれない夕暮れのインターステーツを南に南にと進む。この日、宿泊地は、テネシーの南州境にあるチャタンヌーガという町。この町、その名前がとてもユニークだ。インディアンの言葉に由

来しているものではないかと思い、調べてみたら、こんな紹介がありました。
ご参考まで。

チャタヌガ(Chattanooga）の歴史

1815 年小さな交易所としてスタートしたチャタヌガはゆったりと流れるテネシー川沿いも小さな町だ。
チャタヌガはインディアンの言葉で" 岩が迫っているところ"という意味でそれは町の南にある Lookout Mountain の事です。アパラチアン山脈の周辺に住んでいた、チェロキーインディアンの土地に金が見つかったために、連邦政府は冬の最中、十分な医療や食事も与えずインディアンをオクラホマに強制退去しました。旅の途中で多くのインディアンが亡くなりました。そのトレイルは、涙のトレイル Trails of Tears と呼ばれています。
その道には、春になるとチェロキーローズという白い花が咲きほこる。その花は、亡くなった子供達を哀れむ、母親の悲しい涙の象徴と言われています。

オクラホマをドライブした時にチェロキーの博物館があることを知っていましたので、これまで、チェロキー族というのはオクラホマ辺りに住んでいたインディアンだとばかり思っていました。が、彼らにはこんな歴史があったと知って、改めて驚きを感じました。

この日の行程

St. Louis -→ Waterloo --→ Chester -----→ Cairo ----→ Paducah(Kentucky) -----→ Land between the Lakes ----→ Fort Donelson ---→ Clarksville (Tennessee) ----→ Nashville ----→ root 24 ----→ Chattanooga

走った距離

524mile でした。

三日目　　Dec. 24　　スモーキーマウンテン越え

ここはテネシー、しかも、かなり東にきているはずなので、イースタン時間地域。そんなわけで、あさ、七時にでもなればもう明るいのではとおもったが、これがなんと、まだ暗いのである。おかげで、朝のニュースで、昨日の晩は満月。しかも、その近くに火星が見えたという。天球儀の上で、月と火星が大接近というのである。満月なのは昨日の晩に確認したのだが、火星のことまでは知らなかった。そんなわけで、折角だからというわけで、朝の月を見に外にでた。運がよければ、まだ、西の空に月が、そして、それこそ幸運しかないのだが、火星が見えればと期待しての一瞬である。

そして、もう沈みかけた満月の直ぐした、モーテルの向かいにあるホテルの屋根の上すれすれに火星を確認することができました。惑星は絶えず動いていますので、その季節季節に天体表などで位置を予め調べておかないと、金星や木星以外は、意外とみつからないのです。でも、こうしてたまたまですが、火星を確認することができましたし、また、先日は夕暮れの西に向かうドライブで、水星さえ見る事ができたので、この年にして始めて経験するちょっとした天体現象に思わず感激した次第。

気分よくして、モーテルを出ようとしたら、交差点の向こうで仕切りに話しかけてくる３人ずれの黒人がいた。何やら喚いている。どうも、通りがかり車に乗せてくれていっているようだ。しかし、その言い方が、「ワイフが妊娠しているので車に載せてくれ。」と言っているらしい。「この町の人間ではないので、道に詳しくないから、駄目だ。」と断った。直ぐに諦めたようだが、彼らはこうしてヒッチハイクまがいに他人の車にのって移動するのが常習のようだ。視れば、その妊娠しているという女性も胸を張って元気に歩いているではないか。まあ、旅をしているとこんなこともあるさという話の種。

後で調べたら、このチャタンヌガには、郊外に沢山の自然公園があるようで、観光ツァーなどが、北米各地から組まれているようだが、この日の目的は、グレートスモーキーマウンテンの走破、ということで、ここは町中を車ですこし見学した程度。それでも、立派な教会と、コートハウスらしきものはしっかりと写真に納めてきた。

Chattanooga から Cleaveland と言う町まで、ハイウェイを飛ばし、ここからイーニックドライブウェイになっている 64 号線に入る。この日の宿泊地が South Calorina の州都 Columbia。予定では、大分速くつくので、できれば、Augusta 経由などと考えるほど時間的には余裕があるつもりで、回り道ではあるが、このルートを選択。ところがこれが意外と時間がかかってしまった。でも、それは後のまつり。このドライブコースはそのまま行けば、スモーキーマウンテンに通じているが、途中から山麓を走るドライブウェーに変わる。まずは、Cleaveland をすこしいったところにダム湖があり、ここがなかなかの名所。林に囲まれたこの湖、勿論、アメリカ人好みのレゾート地。ツリに、ボートにハンティングにといたるところにキャンプ場がある。ところが、この時節、この辺り一体雨が少なく、水不足になっていた。そのためダムの水位が下がり、せき止めた湖はあちこちで底が姿をみせている。ということで、本当は車のまどを全開にして、森林浴よろしく森の空気を一杯吸いながらのドライブと行きたかったのだが、どうも、辺り一体に、異様な匂いが漂っている。そんなわけでここは、ただ窓を通してだけの見学コースとなってしまった。

ここから、林のなかを抜け、Maryville に向う。その道すがらがこれまた、大きな林の中に開かれた素晴らしいドライブコース。青空と木々の緑、そして、大きく曲がりくねったハイウェイ。カープはしていても見通しが良いから、少々の危険はあるものの、対向車線にはみ出そうがお構いなし、遠心力の力を感じながら 100 ㌔で飛ばす。これは、ここに時間をかけてきた人だけが体験できるご褒美なのだと、少々得意げ。Maryville から、いよいよ、ナショナルパークになっている Great Smoky Mountain に入る。予定では、321 号のハイウェイを Pigeon Forge まで行く予定だったが、道路がしっかりしているようなので、途中から、もっと森の深い 73 号線に入る。思惑はぴったり。この道路がスモーキーマウンテンの湧き水を一杯湛えた渓流の直ぐ脇を走っているのだ。ネブラスカではとても考えられないような綺麗が水が、岩に当って白い泡を立て、勢い良く流れている。カーブをきるたびに、時に滑滝のように荒々しく、時に絵の具の筆でさぁーッと一筋書いたような滑らかな流れに姿を変えて楽しませてくれる。まことにありがたいのは自動焦点のデジカメ。とにかくシャッターを押せば素敵なショット。だから、左手でハンドルを握り、右手でカメラを持ってドライバーサイドの左の窓から外に出して、片手でシャッターを切るといった具合で、ぱちぱち写真を撮る。勿論、時に失敗もあるが、画像を幾らでもコンピューターに取り込めるし、メリーは大きくなっているので、幾らとってもこれまでという限界がない。これをいいことに、とにかく取り捲るのである。ピントぼけとたまにはあるが、下手も数打てば当る。なかに超傑作も撮れるのである。こちらのこうした道路には、ありがたいことにガードレールが殆どない。

だから、後で写真を見ても、自然の姿がそのまま映っているので、その世界を自分だけが独り占めしているような気になる。それがまた気分を爽快にしてくれる。こんなせせらぎの音を子守唄代わりに聞きながら、次第に高度を稼いでいくと、やがて、スモーキーマウンテンの展望が開けてくる。山道の崖側は、地中のなかから滴り落ちてくる水が、ツララとなって見事な芸術品を作っている。こうして、岩肌に世界で唯一の芸術品の花を咲かせているのだ。そして、Newfound Gap という、標高 5048 フィートの峠につく。勿論ここからは South Carolina と North Carolina を隔てている峰が一望できるのである。標高が二千メートル程度ということと、雨がそれなりにあり、森林が良く茂っているということで、わが日本の山々を暫し、思い描いた次第である。

このグレートスモーキーマウンテン。アメリカが誇る自然の動植物の宝庫。その紹介パンフレットにはこんなことが書いてある。

世界中で、このスモーキーマウンテンに匹敵する、動植物の豊富なところはほかにない。来たヨーロッパの森に比べて優れているのは、ここには、1500 種類以上もの植物、そして、数十種類の天然の魚、200 種類以上の野鳥、それに、60 種類の動物達が生息して居る。こうした、天然の宝庫は、現在、世界遺産に指定され、その保護が進められている。

もともと、この地に生活していた Cherokee は、ここを彼らの言葉の意味で、“煙のような、緑の地 ”を意味する “shaconage ”と読んでいました。彼らはこの地に農場を開拓し、ログハウスを建てて、そして、ヨーロッパ人が入植して来たときには、彼らは融和する方針で受け入れてきたのです。しかし、冨を優先するヨーロッパ人は、彼らの土地を奪ってしまったのです。1790 年代に白人達の入植が始まり、彼らを追いやりはじめ、そして、チェロキーは中西部へと強制的に移住を強いられました。これが有名な「涙のトレイル」となって今に伝わっています。一部のチェロキー族はこの山奥に逃れてここにのこり、この地で生活を続けましたが部族の殆どは、現在のオクラホマまで連れて行かれたのです。それは、1830 年代のころのことです。

この地が公園として指定を受けたのは、1926 年、そして、1934 年に National Park となり。ノース・カロライナとテネシーの州政府、ならびに、沢山の市民、学校、そして、団体がこれらの地を購入するために基金を供出し、そして、これを連邦政府に寄付したのです。

　此処は、それぞれ特徴のあるいくつかの森に分かれています。一番高いところに広がる Spruce-Fir Forest、ここには、月桂樹やツツジが一年中緑を保っているそうです。　そして、広葉樹が茂り、紅葉が見事な Northern Hardwood Forest, Cove　Hardwood Forest　は、深い谷間に保護されて、カバノキ、ブナ、トチノキ、シナノキ、ヒッコリーなどなどあまたの樹木が見られます。そして、同じ様に、Hemlock Forest , Pine-and-Oak Forest もその木々の名前を挙げたら切りがないようです。もちろん、種類の多さを驚かしてくれるのは植物だけではありません。動物達の種類も此処だけにしか生息しないものもふくめ、その数は限りありません。それぞれの森に分かれて、Red Squirrel, Jordan’s Salamander, Red Fox,　Ruffed Grouse, Wild hog, Eastern Box Turtle, White-tailed Dear ,Bobcat, Chipmunk などは、これらを観賞するトレイルがあり、National Park Ranger のガイドで彼らの生態を楽しみながら勉強できるというわけです。
　勿論、どこのパークでも層ですが、こうした自然の宝庫の動植物は無断で捕獲や採取をするとこれがひどい懲罰であることも付け加えて置きます。ちなみに、その罰は、5000 ドルの罰金、＋　6 ヶ月の投獄でそうですからくれぐれもご注意を。

　この森林の中にこれだけの自然があることに感心しながら、Newfound Gap で記念写真をとり、ノース・カロライナに下る。途中から、シーニックバイウェイになっている、Blue Ridge Parkway を走る予定でいたが、なんと此処が closed になっていた。近道ができなくなったのである。仕方なく、１９号線で Ashevelle に向う。が、途中　山のなかで行き止まりになり、ナビを頼りにガイドを頼んだら、これが、サテライトロスエリア。つまり現在位置が分らないと出てきた。しかも、運の悪いことにここはループ橋になった分岐点。この橋を渡っているうちに自分がどちらの方角にはしっているのか分らなくなってしまった。特に山中では、東に進んでいるつもりでも、地形によりとりあえず西に向かって山を下るなんていうこともあるから、一時はパニック状態。それでも、また来たところに戻れば何とかなると居直る。ということで、結局はこの居直りが功を奏して無事、Asheville に辿りつくことができた。とはいえ、かなりの時間を超過。また、Augusta に行くには、すこし時間がかかりそう。というわけで、あとは、一番安全なインターステーツ 26 でおとなしく Columbia に向った。

　　この日の行程
　　Chatannooga　---→　Cleveland　----→　root 64　----→　root 68　---→　Madisonville　---→　Maryville　----→　root 321　----→　root 73　----→　root 441　----→ Newfound Gap　(Great Smoky Mountain)　---→ (North

Carolina) ---→ root 19 --→ Waynesville ----→ Asheville ----→ root 26 ----→ Columbia (South Carolina)

走った距離

383mile でした。

４日目　Dec.25　　チャールストンの町

この日は、Columbia から Jacksonville まで。予定していたコースは、まず、７６号線を東に走り、と知友から 601 号を南に下り、267 号に入って、さらに、６号で、Santee というところに目指す。そして、湖の辺をはしり Mancks Corner を経て、Charleston に行きます。当初は、さらに回り道をして McCleitonville までゆくつもりでしたが、毎日、行程がややきついということが分りましたので、此処は省略。できるだけ、Charleston で余裕をもとうと言うわけです。そのあとは、Savannah,Jacksonville と走るつもりで出発。ところが予定は次々変わり、この日もなかなか厳しいドライブとなりました。
まずは、Columbia を出発するところから。

この町については、実は、小生がアメリカに来た目的のひとつ、現在勤務しているトライコンが、南部に工場を建設するフィージビリスタディーをしているときに注目した町。サウスカロライナの州都であり、また、ステーツ大学があるところから、学園都市として栄えた町というイメージをもっていた。と言うわけで、ここはなんとしてもステーツハウスを見て行かなくてはと、朝、すこし余裕をもつてモーテルを出ようとしたら、そのカウンターで黒人の従業員に捉ってしまった。彼は、いま、此処で働いているが、もともとはアフリカかどこからか来ているらしい。どこから来たのかというので、ネブラスカから来て、これからフロリダまでドライブするのさと返事をしたら、自分はフロリダ、シカゴ、デンバー、それに、ニューオーリンズでも働いたことがあるが、南の方は生活しにくい。そのうち、また北の方の都市に移るつもりだという。ところで、日本は、アフリカ系の人は働くチャンスがあるかという。モーテルのような受付の仕事は殆どなく、また、外国人が働くのは非常に厳しい。
「外国人ではどこの国の人が多いか?」
「簡単に働き口を見つけることができるか?」
などと熱心に聞いてくる。こちらよりも上手な英語だから、しっかりと教育は受けでいるのだろうが、日本ではアメリカのように簡単に仕事を見つけることはできないだろう。もっとも、彼らは、モーテルの受付のような仕事ではなくもっとしっかりした仕事を探しているのだろうが、そこは、アメリカはなかなか厳しい。サラリーの仕事がいかに解放されているからといっても、外国人にたいしては、アメリカ人がもっていないもの、あるいは、アメリカ人よりも優れた才能、技術がない限り、一流の企業に採用されることはないからである。この辺り、アメリカの社会には意外と厳しい階級社会のようなものがあるのである。そんな話をしていたらアットいう間に 30 分くらい経ってしまった。なにしろ、彼に取ってはとてもよい情報源だったようだ。

これはいかんと、あわてて、市内に行き、ステートハウスを探す。ステートハウスの住所がしっかりしていれば、すぐに見つけることができるのだが、地図から得た情報では、ステートハウスのあるとおりの名前しかわからなかった。こちらは、Street と Avenue が

はっきりしているので、これで十分かとおもったが、ちょっと甘かった。通りまで来ているのだが、なかなか肝心の場所に行き着かない。大きな都市になると一方通行が多いからだ。というわけで、同じところを何度か回ったがとうとう分らず、時間が経つばかり。仕方ないと諦めて、町から離れようとしたら、なんと、その脇にステートハウスがあるではないか。ここまできて、このまま通りすぎるのでは勿体ない。今度は、このステーツハウスの回りをぐるぐる回り、何とか気の治まるような写真だけは撮ることができた。

そして、町をはずれに来たところで今度は、またまた馬鹿でかいスタジアムが目の前に現れた。州都になると、ステーツ、あるいは、ステーツ大学のフットボールチームのスタジアムがある。これは、町中あげて熱狂するアメリカならではの建物。よくよく見れば、Gamecocks とある。「シャモ」というニックネームがついているらしい。おりしも、ローズボールに向けてアメリカ中が興奮の坩堝にいるときだけにこのスタジアムは印象的であった。

そのあと、カウンティハイウェイ 76 号線を走るつもりでいたが、どうも様子が変だ。道路が二車線、対抗の道路。林の中の一本道。どうも間違えて走っているらしいことに気がついた。ナビが近道を案内しているのだ。こちらは、少々の遠回りでも、景色の良いところを選んで走るつもりだが、時間の最短距離、もしくは、物理的な最短距離を案内するナビは、どうも正直すぎてそんな融通は効かない。こんなことがあることを知って、こいつは入力する時に気を付けなくてはいけないなと反省したしだい。其れでも、この道路、林の中の一本道で、まだ、通勤の時間前、と言うより、この日はクリスマスの日なので、車の陰が殆どない状況。そんな条件になるとついついスピードがでてしまう。が、そこはじっとこらえて、五マイルオーバーで走る。となんと、少ない自動車に紛れて、パトカーがしっかり巡回している。クワバラクワバラ。

少々の短絡をして、601 号に入り、267 号のシーニックドライブコースに出る。このコースは、Charleston に注ぐ Cooper 川の途中にできた湖、Lake Marion と Lake Moultrie の湖岸に沿って走る道。時々は湖に近づき、その湖面をみることができるが、そうしたところには、アメリカ人が大好きな水遊びのためのヨットハーバーが必ずある。日本のように流れが急ではなく、また、長い行程をユックリユックリ流れているこの辺りの川は決して綺麗な水とはいえないが、其れでも、スピード制限で取り締まりを受けることのないその広々とした湖で思いっきりスピードを上げてモーターボートを飛ばしたら、気分爽快なのはまず疑いなし。こんな遊びでストレスを解消することをすこしは学ばなくてはいけないかも知れない。

この辺りを走っていたら、突然、白い綿帽子をつけた植物の畑が目についた。「あっ。そ

うか。この辺りは綿花の栽培が盛んなのだ。」と、かって、テキサスをドライブした時に視たことはあるが、ここでまたこの綿畑を見たことは、ここがかっての黒人奴隷の本拠地でもあったサウスカロライナということで、また違った感覚で観賞することができた。道路の両側の景色も、冬枯れの木々の姿しかないネブラスカと比べてば、まことに緑豊かな森林が続いている。やはり、ここは南部なのだと改めて感じた。そんな光景の中でびっくりしたのが、そう、アロエの親分。実に、その大きさにびっくり。なんと、背丈が二メートル近くあり、その葉はボートのオールほどはあるような大きさなのだ。

Charleston　の町は、誰もがとても素敵という。実は、つい先日、ホンダのサウス・カロライナに勤務しているアメリカ人が来社し、その折、ここを訪問する予定だといったら、自分の家内の実家がこの町のすぐ近くにある。来たら是非よってくれとの好意。残念ながら、その時には予定もしっかりしていなかったし、その時が初対面ということもあり遠慮してしまった。それだけに、この町の良いところを存分に見ていこうという気持ち。町に到着すると、これが始めて見る大西洋ということで、興奮せずにはいられない。なにしろこの海の向こうはヨーロッパなのだ。この海を越えて西洋人が始めてアメリカ大陸に着たのである。ここには、Sumter Nat. Mon といって、かっての砦の後の記念碑がある。ここを尋ねる。この辺りの砦は、イギリスやフランスではなくスペインが入植した町。したがって、町の雰囲気はスペイン風。とにかく、立派な西洋館が、この砦のすぐ後ろに広がっている。その格調の高さが、今でも港町として栄えるこの町の豊かさを象徴しているようだ。一方、先ほどの Cooper 川の河口を挟んで対岸にある Mt Pleasant の町には、Patoriot Point という公園があり、近代アメリカの防衛の最先端が紹介されている。なんと、航空母艦が博物館となっている。甲板には何機ものジェット戦闘機が艦載されて、今にも、離陸するような格好をしている。この日は年末で見学することはできなかったが、その迫力たるや、遥か彼方から見ただけでも、背筋がゾクットするものがあった。

このあと、サウス・カロライナの海岸線にそって、ジョージアに向う。勿論初めて足を踏み入れる州。そう思っただけでも気持ちがわくわくしてくる。時々見せる海岸線のすぐ脇を走るときには、車のまでを精一杯あけて、大西洋を渡ってくる風の匂いに酔いしれる。そんなドライブをして、フロリダに入った。この日、時間があれば、ビーチまで行く予定であっ

たが、フロリダに入った途端に雨がポツリポツリとやってきた。幸い、この雨は通り雨。ただ、これでは海岸に行っても仕方ないし、何しろ、南部の道は車が混んでいて思うように距離を稼ぐことができず、結局、Jacksonville に到着したのが予定より二時間近くも遅くなってしまった。と言うわけで、この日はおとなしくモーテルに直行。

この日の行程

Columbia ---→ root 48 ---→ Wateree ---→ Lone Star --→ Santee ----→ Eitawville ---→ Cross ---→ Moncks Corner --→ root 52 --→ Charleston --→ Mt. Pleasant --→ Osborn --→ Gardens ----- Beaufort ---→ root 95 --→ (Georgia) -→ Brunswiuch ---→ Jacksonville (Florida)

走行距離

456mels でした。

ジョージアは、常時、情事や。これで、ドーじゃな

五日目　　Dec. 26　　サムター砦

この日の予定は、Jacksonville から Miami まで、フロリダの東海岸好きなだけドライブです。

すこし早起きし、昨日、行くことができなかった Jacksonville の **Beach へ。**とにかく、潮騒の香は大西洋、ヨーロッパからの風が肌をさすってくれるのですから、同じ海と言っても感激してしまいます。浜にでれば、思わず、「これが、Atlantic Ocean だ。」と叫びたくなります。2000mile 近くを走りぬけて来た実感です。

昨日ちょっとぱらついた雨もこの日は全く心配なし。浜に寄せ来る波の音色に、暫し、ふるさとの沼津の浜と、そして、家族を残してきた千葉の九十九里の浜の潮騒の音を思い出す。寄せてく引き、引いては寄せる限りない小波の響きに、どんな悩みも打ち消されてしまうような思いになるのは、やはり海の大きさの精ではなかろうか。くよくよしたって、悩んだって、そんなものこの大自然の動きに比べれば、ちゃちな人間ごとさとでも言いたげな無限の偉大さを感じるのは私１人ではないだろう。此処の浜べは、砂がとても細かい。砂というよりも、むしろ粉という感じ。だから、とてもしっかりしていて、歩いていても足が沈むような感じはなく日本の浜べの砂とは大違い。こんな感じなら、予定している Ditona の Beach での　ビーチドライブが楽しみだ。海岸で、小さな二枚貝の貝殻を見つける。が、なんとなく小さなものばかり。ちょっとばかり立ち寄って、大きなものを見つけようというのは慾が深すぎる。貝殻がロマンチックなのは、耳を当てると潮騒の音が聞こえてくるという話からか。そんなことを考えながら、少しばかり失敬をする。

ここから、A1A というバイパスのハイウェイを走る。潮風を一杯に受けでのドライブ。だが、ここからずっと南に賭けて、海岸線とハイウェイとの間にびっくりするほどの高層ビルが立ち並ぶ。勿論、レジャー用のホテルがメインなのであろうが、それにしてもその数の多さに圧倒される。そして、その谷間には、個人の、これまた立派な住宅がずらり。丁度、防波堤の上に住宅が建てられている格好。それにしてもその豪華なこと。フロリダといえば、台風の通り道。海からの風も一筋縄ではいかないだろうと思うのだが、よくよく考えて見れば、台風はいつもメキシコ湾からやってくる。それがフロリダ半島、ただ、此処は半島といっても東西 100mile 近くある。それを横切ってくる間に随分台風は弱くなるのであろうから、心配するほどのこともないのかもしれない。となれば常夏のフロリダ。これほど素晴らしい楽園はないというわけか。立派な門があり、そのずっと奥に難題も車が並ぶガレージ。三階建ての家には、階段を登って玄関に入る。二階、三階にはそれぞれ大きなベランダがあり、屋上には展望台がついている。とにかく、その贅沢なつくりにはびっくりする。これが一軒や二軒では、なく、立ち並ぶ家がそれぞれ個性のあるつくりの館ばかりなのである。フロリダでも、この辺りは早くから避寒地として、北部の金持ち達がこぞって別荘を建てたという。その名残で有名な金持ちがのこした博物館も沢山紹介されている。そんな町が St. Augustine の町である。ここには、シカゴの億万長者、Lightner

のコレクションを紹介した博物館がある。この博物館、もともとはホテルであったものをライトナーが買い取り、博物館としてオープンさせたものとのこと。アメリカ人の金持ちは、どこかの国の成金と違い、ホテルを買い取るだけでなく、そこにホテルよりももっと貴重なコレクションを整備するのだから、桁が違う。残念ながら、此処はパス。

その代わり立ち寄ったのは、Castillo de San Marcos　サンマルコス砦。ここは、スペインの砦。つまり、フロリダを征服したのはスペインということ。その土地を海賊や、イギリスなどの敵からまもったのがこの砦。当初は木造のものであったそうだが、これを貝殻でできたコキーナという材料で固めたダイヤモンド形の頑強な砦。23 年の歳月を費やして作られたというこの砦。1695 年に完成して以来、一度も陥落したことがなく、名実ともに難攻不落の砦となった。砦の中にはチャペルや弾薬庫、それに兵隊の宿舎から井戸まである。勿論、砦の上には今でも大砲が数十門も立ち並び、その威容を誇っている。

ありがたいことにここが National Park。つまり、持っていた National Park Pass が使え、入場料がただになりました。おかげで沢山の記念品を買うことができました。それになんといっても、解説文に日本語のものが用意されていたこと。至れりつくせりのサービス。これが National Park では当たり前なのです。せっかくですのでその解説文を紹介し、アメリカの歴史をすこし勉強したいと思います。

なぜ、植民地が此処にできたのでしょうか?、そんな疑問に答えてくれます。かってスペインの商船は、メキシコ湾流に乗ってフロリダの沿岸を北上し、母国へと向ったのです。この重要な商船ルートのために、ここ St. Augustine はいつも覇権争いの中心となったのです。と言うことでスペインは此処に要塞をつくったのです。

この孤立した前進基地に入植が始まったのは、1565 年から。スペイン人の兵士やその家族にとっては、毎日が生存を駆けた戦いそのものだったのです。当初は木造の砦は何度も改築されたのですが、町を守るには不十分で、このため、1672 年にスペインの総督センドーヤが命じて、今日ある貝殻岩のどっしりした塁壁の砦としました。

スペインと大英帝国の間で絶え間なく繰りリ返される戦争により、St. Augustine も侵略や戦闘、砲撃といった戦禍に巻き込まれました。カスティロは、イギリスの過酷な方位砲撃に二度も耐え抜きました。最初は、1702 年で 8 週間にわたる攻撃が続き、二度目は、1740 年、6 週間に及ぶ攻防でした。七年戦争も終盤を迎える 1762 年、イギリスは、カリブ海におけるスペイン商船ルートの重要拠点であったハバナを押さえます。第一回のパリ講和条約で、スペインはこのハバナの変換の見返りとして、フロリダの全領土をイギリスに譲渡することになりました。

それ以後も、イギリス軍はこの砦を守るために多大の犠牲を払うことになりますが、多

くの紆余曲折を経て、今日に至っているわけです。アメリカの南部には、どこにもこうした歴史があることを知ることができたのはとても大きな収穫でした。

町には観光用のトローリーバスがはしっていて、気軽に待ちを観賞することができるようになっている。この町に滞在してユックリと歴史を楽しむのにはもって来いの足である。

St. Augustine の町をでて、さていよいよビーチドライブでできるという Daitona Beach。シーズンになれば、オートバイヤローたちが集まり、この浜辺でけたたましい爆音をたてて、ビーチドライブをするらしい。車の乗りいれもでき、窓を一杯あけ潮風を浴びて、オープンカー気分でここを走るのが若者達のステータス。そんな気分を味わおうと目論む。

ところが浜についたら、ビーチドライブができるほど砂浜がない。堤防まで波は迫っている。確かに此処の砂浜は硬いが、入り口は、Closed になっている。Jacksonville でもそうだったが、浜が思ったより狭い。どうしたわけか。これで車が走れるわけがない。理由は直ぐに分った。今は、一番潮が満ちている時期なのである。そういえば、チャタンヌガで視た満月。考えてみれば冬の満月は、一番潮が満ちるとき。浜は今が一番狭いというわけである。ここに来るには、夏でなけりゃ駄目ということ。そんなことガイドブックに書いてなかった。不親切と言いたいが、それも偶々此処に来ていい思いだけをするのは虫が良すぎると、潔く諦めてレゾート開発のすすむビーチ沿いのハイウェイ 1A1 を突っ走る。

ここから、Miami まで、インターステーツ 95 を走る。いよいよ気温は上がり、ケネディスペースセンターのあるオーランド辺りでは 65°F。このスペースセンターには秋にたまたま学会があり、これに参加したときに暇を見つけて、というより作ってきたことがあるので、ここはパス。そして、やがて Miami の町が遠くに見えてくる。今日の宿泊は、その手前、Fort Lauderdale という町であるが、少し無理をして宿にいく前に Miami の町まで足を伸ばした。ハイウェイから望む Miami の町は、数知れないほどの高層ビルが立ち並び、さすが何国の大都会という感じ。道路は片側 5 車線のもあるが、其れでも車が一杯。とにかく混んでいる。こんなところをよそ者が走るのはとても気が疲れる。一番左側の車線を走っていて、右からハイウェイを降りようとするなら、3 つも 4 つも車線を変更しなければならない。モタモタしていると出口を通り過ぎてしまう。地元のひとは、そんなハイウェイでも上手といおうか、無鉄砲と言おうか、猛烈なスピードで感激を縫って右に左に車線を変更している。まるで、NAS CAR のレーサー並みのテクニックといいたい。こんな運転を日常しているのだから、NAS CAR のレースがアメリカ人にとって人気のあるのは理解できる。国民二億が NAS CAR のレーサー気分なのだ。この車線変更にはコツがある。とに

かく、スピードをあげ、人よりも先を走ること。そうすれば、絶対に追突される心配はないし、自分の車のコントロールだけで、安全に車線変更ができるというわけ。こちらの車の運転で感心するのは、こうした無鉄砲と思われるような車に抜かれても、抜かれたほうは、むやみに腹を立てたりしない。とにかく、道は広いし、自分のペースで走ればいいわけだ。こんなところが国民性の違いかと変なところで感心する。

やがて黄昏迫る Miami のダウンタウンに到着。これも、有能なナビのおかげ。ハイウェイの出口もしっかりと一マイル前に、右にでるのか、左に車線を確保するのか的確に指示してくれるからだ。この案内に感心すること仕切り。

話には聞いていたが、Miami は建設ラッシュ。マイアミビーチに行こうとしたがすでに夕暮れ。そこでダウンタウンのなかを暫し走り回る。東洋人やら、カリブの人たちで賑わうレジャーランドのある海岸にでた。その岸壁に方を寄せ合う恋人どおし。これはうらやましい、と窓越しに走りながらの湾ショット。否、ワンショットとなった。

この日の行程

Jacksonville --→ Jacksonville Beach --→ root 1A1 --→ St. Augustine --→ Palm Coast --→ Daytona Beach ---→ root 95 ---→ Miami -----→ Fort Lauderdale

走った距離は

432mile でした。

六日目　　Dec. 27　　愛車よ、ここがキーウェスト

いよいよ、この旅のクライマックス、この日はキーウェストへのドライブです。

天気は、何でこの日がこんなにすばらしい天気になったのかと不思議に思うくらい、われながらこの幸運を感じました。とにかく快晴です。天気予報ではこのところ雨雲が始終フロリダ半島を横切っていたからです。

フロリダはとにかく車が混んでいて時間がかかりすぎ。ということでこの日は早立ちとし、できるだけキーウェストでゆっくりする予定。そのため、ターンパイク（有料の高速道路）を使い、快適に南へ、南へ。

暗いうちに早だちしたということで、Homestead と言う町につくころ、空が白々としてきた。この町には、Miami Speedway があることで有名。つまり、この辺りの NAS CAR マニアが溜まり場というわけ。アメリカ人はとにかく車の感激を縫って、流れるように飛ばすのがすきなんですねぇー。勿論、スピード違反も厳しいのですが、癖になるとこれがやめられない気持ちも分らないでもないんです。あの広くて、真っ直ぐな道路、ハンドル捌きの腕のみせどころをこんな風にして走らなければ退屈なのです。こんなに荒い運転をしていても、事故がないのが不思議なくらいと、思っていたら、渋滞が始まった。なんのことはない、つい、その先で事故を起こしていたわけだ。というわけで、アメリカ人にできても、よそ者の我々にはこれはかなり危険なこと、決してまねをしてはいけないとこころに言い聞かせての安全運転を心がける。そして、暫く、ハイウェイの両側には散水をしている農園が続く。その水滴が今度は霧となり、視界をさえぎっている。たかが農園といっても、こちらに農園の広さは言わずもがな。何マイルもこの霧のために道路が見えなくなるんです。プラントされているのは、パパイヤ。イヤー、これが南国の風景なのですね。青空にスーと延びた幹の上に、青々と茂ったあの葉っぱ。実に気持ちがいい。そんな農場の中を走っている道路は片側一車線であるので視界が悪いと追い抜きができない。勿論、危険際まりないというので、ハイウェイパトロールが、スピード制限と、追い越し禁止の取り締まりをやっている。この車が先頭にいるから、みんな行儀正しく走っている。どの車もこれから、レゾート地に行くので気持ちがうかうかしている。そんな時の事故防止に配慮してのパトロールであろうが、こんなところにも、アメリカの合理性が伺える。

農園の中を 30mile くらい走るといよいよ、Key West へと繋がる砂洲の上にできたハイウェイとなる。最初の町は、Key Largo と言う町。こり当りから、ハイウェイの両脇には、パールヤシの並木道が繋がる。思わず、エルビスプレスリ

ーの「ブルー・ハワイ」のイメージが頭に浮かんでくる。もう、そんな歳ではないんですが、美人に囲まれて、オープンカーでこんな道を飛ばしたら、楽しさこのうえないだろうねぇーなどと想像する。そして、島から島へと繋がる橋を渡るときには、直ぐ眼下にコバルトブルーの紺碧の海が広がっている。いよいよカリブの海だ。コバルトブルーがどんなブルーかって。そんなこと聞かれると困ると。思い出すのは、今人気のパイレーツ。自分も海賊になったつもりですきにこの海を航海してみたいね。横に好きな人がいて、夕陽を眺めるなんて最高なんだけど。海って言うのは、あの広さが気持ちをおおらかにしてくれんのでしょうか。ついつい鼻歌が。勿論、大好きな「琵琶湖周航の歌」です。

もう一つ、気のついたこと、こちらのコンクリートは実に白いのです。あの、砂浜のところで感じた白さ。理由はやはり同じなのでしょうか。砂、そのものが花崗岩が砕けたものではなくて、もともと貝殻などが砕けてできた砂のために白いのではと思っているのですが、とにかく、コンクリートでできた橋のその白さが、海の青、空の青、そして、パームヤシの緑とよくマッチしているのです。此処は、そんな原色の世界といった感じです。だから、真っ赤なハイビスカスがその美しさを誇るかのようにおもっいっきり真っ赤な花びらを広げているのではないでしょうか。

そして、いよいよかの有名なセブンマイルドブリッジにさしかかる。その長居の、なんのって。解説書には、行き着く先の島が海の彼方にかすかに見えます、なんて書いてあったが、まるで、水平線の下に沈んでいますと言ったほうがその長さの実感が湧いてくる。橋の一部は、この下が水路になっており、船の航行があるために高くなっている。が、良くもこんなものをつくってくれましたと言いたくなるような、これは、もう芸術品の世界です。マイルドセブンではないが、確かに、セブンマイルにはマイルド。そんな駄洒落のでるくらい、この橋を楽しむ。

感心したのは、この道路の脇に実は、もう一つ橋があるのです。これは、かっての旧い橋なのか、あるいは、水道ででもあるのかよく分りませんが、ここがまた、釣りキチには答えられない海釣りのポイント。沢山の人が車を乗り入れて、中には、テントまで張って釣りを楽しんでいるのです。その数もまた馬鹿にならない。アメリカ人のこのレジャーを楽しむ徹底ぶりには感服状態。どこまで行くのか、距離にして、この砂洲のハイウェイ、なんとなんと 130mile 以上あるのです。100 キロて飛ばしても二時間は掛かります。でも、右、左とも海のこの光景を見ながらのドライブですから、決して飽きることはありません。

そしてやがてキーウェスト。これがまた、言ってびっくりするほどの人の混み様。人気があるのです。このレゾート地。それに、もうこれ以上、この先に

陸地がないのですから、私と一緒にきた車は、みんな此処で行き止まりというわけ。空いてる筈がないのはわかっていても。この人の多さに圧倒されました。

ここは、ハイウェイ 1 号の 0mile 地点のあるところ。アメリカの最南端。そして、海の上の楽園。こんな素晴らしいところですから、沢山の観光客が集まるのですが、町の中の見学は、自分の車ではなく、乗り合いの観光バスに乗るのが常套手段。そして、町なか見学には沢山のツァーがあり、それぞれが好きなところで、この車からおりて、好きなだけ見学し、そして、別の観光バスにのって移動をしている。自転車は勿論、ゴーカートのような電気自動車がレンタルされており、家族でこれを乗り回し、狭い路地でも自由に出入りして、この町の見物を楽しんでいる。私のお目当ては、ここで「老人と海」という小説を執筆したというヘミングウェイの邸宅を訪問すること。といってもこの狭い町にはパブリックの駐車場はなく、路上駐車が許可されているものの、ヨソ者が止めるようなスペースはない。そこで、近くにあったコンビ二に食料調達のような振りをして、此処に車を止め、暫し、市内見物に行った。ヘミングウェイの邸宅は人気の観光スポットで世界各地から集まってきたという感じで、いろいろな国の人が此処にきて訪れているようだ。チケットを買うために並んでいたら、直ぐ後ろに、「お母さん、うちは全部で、36 ドルだね。」と日本語が聞こえてきた。えっ、此処にも日本人という感じ。こども二人連れのご夫婦。聞けば、ジョージアから来たとのこと。現地の駐在員であろうが、バカンスに此処まできたというわけ。これくらいの家族サービスをしないと、こちらでは、直ぐ離婚ですからと言おうとしたが、お父さん、家族を置いて車の駐車に言ったきりなかなか帰ってこない。

ヘミングウェイの邸宅は、二階建てで、様々な部屋が公開されており、それぞれの部屋の解説がされていた。日本語のパンフレットまであったので、結構日本の訪問者もいるということか。二階から見るこの邸宅の庭がまた素晴らしい。此処が南国であるので、温室を作る必要はないのだが、ここがまるで熱帯植物園のように、ざまざまなものが緑豊かに茂っていた。なかに、ふさふさし垂れ下がったバナナの房が、花の間から覗かせているのを視たときには、これまで、ちいさなものは視たことがあるが、ここのものはその大きさがいつも我々が手にしているほどのもの。なるほど、こんな風にしてバナナが取れるのかと、みてびっくりの実物であった。驚いたことに、ここに竹が生えているではないか。アメリカにきて、竹の生えて

いるのを視るのは、初めて。孟宗竹のようであり、真竹のようであり、なんとも不思議な竹(?)、間違いなく竹だったと思うが、とにかく、南洋植物に混じって竹を見たことにびっくり。

　ヘミングウェイの邸宅の前は、ライトハウスになっている。ここも人気の観光ポイントということであったが、時間も大分経ち、車も心配であったのでここは省略。

　キーウェストに来たこだわりは、ここで、レターを投函すること。アメリカの最南端から、日本の友人達に今年一年の報告をしようということで、一ヶ月ほど掛けて、約 200 通の封書を持ってきた。キーウェストの郵便局から出せば、これは記念になるだろうとの思いからだ。さすが、此処の郵便局、こんな風にこだわる人が多いと見えて、なかなか立派なもの。無事、ここから投函することができたが、さてさて、何人のひとが消印まで見てくれるかな。これも、私の遊び心を理解してくれる人が 1 人でもいれば痛快という、下心です。

　キーウェスとのこだわりと言えば、ここが U-1 の出発点であること。とにかく、アメリカのハイウェイをいくら走っても此処だけにしかないというのが、この一号線のゼロ点。まあ、石垣島の一番南の岬のようなものかといってしまえばそれまでだが、ここを出発点にして、この広いアメリカを走りまくったと言えば、これは、ちょっと話の種になるのでは。こんなことにこだわるのも歳寄りの傾向ですかね。

　キーウェストに来たら、Most southern point に行かなくてはと思っていたが、実はここよりも、Fort Zachary Taylor Park のほうが南になるというので、この公園を探す。ところが、この公園に入るにはアメリカ軍の基地のなかに入らなくてはならない。そんなことがガイドブックに書いてあるのだが、この入り口がなかなか見つからない。見当をつけていったのだが、そこにあるのは厳重な鉄縄網が張り巡らされているだけ。でも良く視ると、中をビーチサンダルを履き、水着姿の人たちが歩いている。同じ様に入り口を探しているという、別のパーティに聞いても、自分たちも探している最中で全く分らないという。で仕方なく、とにかくここを一周してみようと、一方通行を何度か曲がりながら走っていたら、車がどんどん吸い込まれていく路地がある。これだ、と確信し、その後に付いていったら、案の定、この基地の入り口となった。この奥にビーチがあり、ここ

が事実上のアメリカの南端。この基地は、一部が一般に公開されている公園なのだ。
　此処こそ、最南端だというビーチに、車をとめ、浜辺にでて見たら、これまた、沢山の人が海水浴をしている。ここが、カリブの海とメキシコ湾の境目、アメリカの最南端。左が大西洋で、右がメキシコ湾。あの向こうにジャマイカがあり、ずっとこっちの海はキューバに綱がっているのか。いや、ドミニカがこっちかな。でも、ここから南にアメリカはないのだ。じゃー、まあ、いいか。なんて言いながら、満足、満足。
　ここの砦は、さすが立派なもの。観光コースとなっていたが、大きな基地の中にあるだけに、時間の余裕がなく断念。それよりも浜辺で大西洋の水に浸る。折角、水の中に入ってポーズをとったのに、シャッターを頼んだご夫婦の主人、気を利かせて、私の満足気な顔の大写しの写真を撮ってくれた。肝心の水につかった足が写っていない。残ねーん。でも、まあ、いいや。

　キーウェスの町を歩いていたら、おっ、ホンダのオートバイだ。なんと、目の前にホンダのゴールドウィング。おっっ。これは、アメリカで販売されているホンダの最高級のもの。このオードバイのシートを当社が供給しているのだ。しかも、二台。後ろに奥さんを乗せている。みれば、お年はかなりのご年配に見受けられる。こちらがあまりにもじろじろ見るものだから、「はーい。」とVサイン。ナイス、オートバイとまずほめ、このシート、私の会社でつくっているものだ、といったら、グッドの返事。気持ちよく、エンジンをふかして、交差点を越えていった。アメリカでこうしてバイクに奥さんを乗せてツーリングをするのはとても人気があり、それも、ご年配の方が楽しんでいる。勿論、長距離をオートバイで走るのは疲れるが、そんなときには、オートバイをトラックの上に乗せてくるのである。でも、頭にアメリカの国旗の模様のバンダナ、白髪混じりの口ひげつけて、ムキムキの腕を出した真っ赤なシャツ、ジーパンをはいて、後ろには、やや中年太り気味の奥さん、あの格好はなかなかどうに言っているねぇー。どう、思います?。

　帰りのハイウェイもこの調子で、景色を堪能。キーウェストまでの往復で二倍楽しんだ。しかし、びっくりしたのは、帰り道ですれ違った車の数の多さ。丁度私が通りすぎて事故もあったようで、それで渋滞していたのかもしれないが、20mile くらい、びっしりなのである。私はこの日、朝来て、夕方かえるというスケジュール。このため、この渋滞に巻き込まれることはなかったが、考えてみれば、この日はクリスマス明けの休暇の始まり。そんなアメリカ人がど

っと此処に押し寄せてきたのかも知れない。僅か 1 日の違いで、本当に助かったと思った。

カリブの海に沈む夕陽を見るのが、此処に来る人のこだわりというが、そのためには、いつもより数倍も高いホテル代が必要。ということで、その夕陽を背に受けて、走りながら楽しむことで我慢した。それにしても、キーウェストへのドライブはとてもよい思い出となりました。

この日の行程

Fort Lauderdale --→ Homestead ----→ Key Largo ---→ Matathon --→ Key West --→ Homestead --→ Fort Lauderdale

走った距離は、390 miles でした。

七日目　　**Dec. 28**

エバーグレードからタンパの町まで

　　このエバーグレードというのは、フロリダの南部に広がる大湿原だ。東西に 100mile、南北に 150mile くらい広がるこの湿地帯が、自然の動物達の楽園であることは確か。人口が多いフロリダとはいえ、ここは人間の数はすくなく、動物達のほうが我が物顔で生息しているのである。

> マイアミ市は北回帰線に近い北緯２５度に位置し、熱帯に近い亜熱帯です。夏の間は影が余り出来ません。
>
> フロリダ半島の大部分は、新しくて柔らかい石灰岩（サンゴ礁がほぼそのままで殆ど変性を受けていないので生物岩と言った方が適当）がその表土を構成する大部分で、一部、広葉樹林帯が形成され若干の腐葉土に覆われておりますが、アルカリ性が強く火山国の日本（酸性土壌が多い）に比べて、そこの植物分布は大変異なっています。例えばアザレア科（ツツジ、シャクナゲ等）の植物は殆ど見られません。
>
> マイアミはフロリダ半島南部に大きな面積を占めるエバーグレード国立公園に象徴される、平旦な湿地帯で高温多湿の場所です。ここの蚊の大群はフロリダの名物です。保健衛生的見地からすれば、当地のロゴマークはイルカよりもエバーグレードの王者、アリゲーターにして貰いたいと思います。それを頂点にして、魚類、小型の爬虫類、両生類、鳥類、哺乳動物（齧歯類）等の種類、数も豊富です。彼らが好餌とする節足動物も同様に種類と量が豊富であり、こう言った自然の生態系に囲まれて生活しているヒトも決してこの環境に無関係では無い筈です。

とあるのは、マイアミにある日本領事館のフロリダ紹介。ただ、これだけではエバーグレードのイメージはなかなかわいてこないでしょうが、ここを東西に縦断しているインターステーツ 75、すなわち、Alligator Alleyse というターンパイクは、　74mile ほど真っ直ぐな道路なのです。大体、東京から沼津くらいがカープのない道路ということです。この高速の両脇は、高速の基礎を盛るために使った土を掘ったために道路の脇からすぐに沼になっています。ですから、居眠り運転をすればそのまま沼にドボン。後は、これ幸い、天からの餌のお恵みといった具合でアリゲーターが群がってくること間違いなしの状況です。た

だ、両脇には金網が張り巡らされ、道路にアリゲーターは入りこめないような処置がなされています。ここを横断する途中に二箇所ほど Rest Area という場所があり、ここで自然現象を処理できるというわけです。そして、ここの展望台、と言っても二階建て程度ですが、此処に上れば、十数キロも先までこの湿地帯が見渡せるような状況。たまに通る人間様よりも、野鳥の方が幅を利かせていて、我々が近づいても、本当に間近に近づくまで逃げようとしないのです。帰って、こちらのほうが襲われるのではないかと思われるぐらい大きな鳥が、「お前達は、よそ者だろ」と言いたげに睨み返してくるのです。一羽や二羽ならなんのことはないが、その数に圧倒されるのである。ここはおとなしくご挨拶程度に記念の写真を撮り失敬する。これでもかこれでもかというくらいに真っ直ぐなものだから、自然にスピードが出てします。そんなドライバーの心境を計っているかのようにポリスが取締りを　やっていた。しかも、工事区間に入ったところである。実際には、年末で工事はしていないのだが、アメリカの場合、この工事区間で違反をすると罰金が二倍になるのである。だから、普通のところででなら 15 キロ程度のオーバーでも大したことはないのだろうが、此処でやるとその倍であるから痛い。十分に注意をして、捉った人には「不運だね。」と同情の言葉をかけて横を通りすぎる。このターンパイクの終点は、Naples と言う町。フロリダに住む人が休日を此処で過ごす　ことが夢だと紹介されている。綺麗な浜辺があるというので、ちょっとよってみようということで、海辺の公園を探す。ナビに案内されて近くまで言ったのだが入り口が分らない。すると、高級住宅街から出てきた車があったので、これについて走っていたら、そのまま、パークにと到着。しかも、空のスペースがある。おっ。これは幸運。調子がいい、といった具合で、此処に駐車。目の前には東屋風のバンガローがあり、その先に真っ白なビーチが延々と続いている。海岸線には、高級な住宅というよりホテルがずらりと並んでいる。しかもビーチには人影がまばら。みんな、パラソルや椅子を持ち出して、思い思いに甲羅干しをしたり、海に入って貝殻広いなどをしている。優雅なものだ。キーウェストのごった返していたあの、フォーと・ザッカリーの浜辺と比べれば、雲泥の差でノンビリしている。浜で遊んでいる人もゆとりたっぷり。こちらも気分がよくなり、ここはメキシコ湾の海とばかり、水のなかに浸かり記念の写真を撮る。とすぐ横にビキニ姿のお嬢さんが映っているではないか。自動シャッターで撮ったのでなんの下心もなかったが、この写真まずまずのもの。いい記念になりそう。なんていい気になっ

ていたのが、大間違いのもと。ここで暫く遊んで、さて、道草を食ったと言うわけで、Fort Myers に向う。と、ふと見ればフロントガラスに黄色い枯れ葉のようなものが挟んである。最初は枯れ葉と思い、ワイパーを回して飛ばそうとしたら、これが飛ばない。仕方ないので車を止めてとってみたら、なんとこれが駐車違反の罰金催促状。「えっ、なんで」と思ってよくよく見れば、あの場所は、許可された車両以外は止めてはいけなかったようだ。つまり、あのビーチは特定の人たちしか入れないプライベートビーチだったというわけ。その金額、22 ドル。しかも、10 日以内に払え。出なければ、罰金がその倍になるという。「やられた。」　此処で文句を言っても仕方ない。高くついたが、諦めが肝心と、この嫌な思いを捨てるために、ハンドルを握りながら、「Naples 、馬鹿やろー」と叫んで、腹を納めた。

Fort Myers と言う町は、小ぢんまりした町だが、町には、2000 本近くのパームやしの木が植えられており、町は南国情緒一杯。なんと、驚いたことにこのパームを最初に此処に植えたのは、かの有名なエジソンというから、これもいい思い出。とにかく、真っ青な空を背景に緑豊かに茂っているのを視るとそれだけでもこころが現れたような気になる。この辺りの浜はどこもまるで塩ででもあるかのように真っ白なのである。綺麗な砂浜だ。

実はこの町に立ち寄ったのは、貝殻の工芸品を販売している世界一大きな工場、兼、お店があったため。ここで、フロリダの雰囲気一杯のお土産を買おうというわけ。ということで、このお店によって、その広さ、品物の多さ、そして、安さにびっくり。じっくりと視て回ったら、半日では済ませられないくらい。お店の庭は遊園地になっていて、ボート遊びができたり、植物園があり、大きなレストランさえそまわっていた。ここで、店員から、「お客さん、これ随分重いですよ。」といわれるほど、あれこれ買い集め、フロリダ行きを励ましてくれた人たちへのお土産とした。

ここから、インターステーツをさけて、海岸線の 41 号を走る。どうしても、海を見ながら走りたいのである。今日は時間をたっぷりとってあるが、フロリダのハイウェイは、とにかく車の数が多く時間ばかり掛かる。タンパでは、どうしても水族館に行きたいものだから、すこし気はあせったが、此処まで来て海を楽しまないわけには行かないのである。が、このあたり、レゾート開発が進みすぎている感じ。フロリダの人気スポットというだけのことはある。ものすごいホテルの乱立状態。そして、やがて、タンパ湾に到着。ここで、湾の陸地側を通っていけば、難なくタンパに行き着くところだが、その対岸にある St.Petersburg と言う町が、これまた、ものすごいレゾートタウン。この町に入るには、またまた立派な橋を渡る。嬉しくなるほど見事なつり橋である。Sunshine Skyway Br.の名前がついており、長さは１０マイルくらいある。向こうの町が水

面に見え隠れするほど。しかも、橋のすぐしたはコバルトブルーの海ときている。気分爽快。ここで少し飛ばそうかい。というぐあい。ところが驚くなかれ、タンパの町にいくには、もう一つ橋がある。Howard Frankland Bridge という。この橋は五マイルくらいであるが、それにしてもこんなに楽しいドライブができるなんて思いも寄らなかった。少々時間がかかったが、これでタンパの町に辿りつき、さて、いよいよ目的の水族館。ナビに案内をさせていたが、どうも同じところをぐるぐる回っているような気がする。ダウンタウンの中に入ると道路が一方通行のところがあり、これを切り抜けるためにわざわざ大回りをしなければならないようなことがある。知らない土地では、よそ者はなんともし難いところ。車を止めて何度か入力をしなおし、やっとの思いで水族館の手前まで辿りついたが、今度は、目の前にある駐車場が閉まっている。入り口のロータリーに車を止めて、切符売り場の係官に駐車場の場所を聞いたら、丁寧に教えてくれたのはいいが、少々場所が離れているようだ。こちらでは、ハンディを持ったひとには最高のサービスで、玄関前に専用の駐車場があるが、一般の人の駐車場はやや遠い。それでも、料金が安いので仕方がない。教えられたとおりといっても、半分は感を働かせてではあるが、すぐに駐車場の入り口を見つけることができた。時間が後 1 時間で閉館というときだったので、すでに帰る車もあったりで、比較的、入場口に近いところに車を止めることができた。

すんなりと駐車場に車を止めることができたし、今度は駐車違反になる心配もないので、気分さわやかにチケットを買う。と、よくよく見れば、シニア 62 歳以上は 3 ドル割引と書いてある。「えっ。ひょっとして私もシニア?」というわけで、チケット売りのお姉さんに、シニアの割引は私もしてもらえるのかと尋ねたら、此処ではひとまず切符を買い、中のサービスカウンターに行けば、割引をしてもらえるという。これは締めたという具合で、意気込んでサービスカウンターで交渉したら、「ああ、いいですよ」と言ったぐあい。勿論、写真入りの ID を見せ、現金で 3 ㌦いただいた。とこれは、気持ちが大きくなり、ついつい土産物代になったというわけです。

この水族館、南洋の海に住む様々な魚を紹介しているが、人気の的は、サメの水槽。幅が十メートル以上もあり、そのなかを何匹かのサメが悠然と泳いでいる。1 日に何回か餌をやるショーがあり、そのときには檻が水槽に沈められ、この中に係官が入ってサメに餌をやる。なかなか人気のあるショーのようだ。たまたま始まるというので、私も覗いていたが、これが檻の中に係官が入って

いるのになかなかショーが始まらず、結局、時間がなく餌をやるところまで視ることができなかった。そのかわり、沢山の熱帯魚を楽しむ事ができた。とりわけ、龍の落とし子のコーナーでは、まるで海草のような形をし、水中を揺れ動いている龍の落とし子を見て、思わず噴出してしまった。

　と言うわけで、この日も悲喜こもごも沢山の発見をした楽しいドライブの 1 日でした。

この日の行程

Fort Lauderdale --→ Weston --→ Naples ---→ Fort Myers --→ North Port --→ Venice --→ Sarasota ---→ Bradenton ---→ St. Petersburg ---→ Tampa

締めて走行距離は、

315mile でした。

八日目　タンパからモービルへ　　Dec. 29 2007

この日は、フロリダ半島の西海岸の北部を走り、メキシコ湾に沿っての海岸線ドライブ。Tampa から Perry にかけては、フロリダの湿地帯を走りますが、底から西に向かう 98 号線は風光明媚なドライブコースです。さてさて、この辺りの海の様子はどんなものか楽しみな１日です。宿泊を予定している Alabama の Mobile は学園都市ときいています。この日の予定走行距離は、５１０マイル。ちょっと強行軍かも知れません。

Tampa を 7:00 に出発。当初は、海岸近くにある Spring Hill まで行く予定でしたが、モーテルがハイウェイ 41 の近くにあったので、これを省略して Brooksville と言う町まで、田舎道を走る。田舎道と言っても、中央分離帯のある片側二車線の列記としたハイウェイ。朝が早かったので、道路が混んでいてうんざりしてことから比べれば快適なドライブ。ところが、Tampa を出発したころは青空が見えていたのに、Crystal Rever と言う町あたりに来たらどうも前方はなにやら怪しげな空模様。と、そのうち、道路に靄がかかり視界が 200 メートルくらいしかなくなってきた。天気予報ではフロリダの北部には雨雲があると言っていたので、いよいよかと観念。ところが、遠くから見たときには雨雲のようなものが実は、大変な靄であることがわかった。この靄のなかを二時間くらい走る。あまりにも長い靄なので、これは途轍もない範囲で靄が掛かっている。どうしてこんなにまで広い範囲に靄が掛かるのか不思議でならなかった。大体もやなどというものは、風の通り町があって、そこに部分的に発生するくらいにしか思っていなかったのだが、どうもあとでニュースをみたら、この日はアメリカの南部一体に靄が掛かっていたとのこと。それもフロリダだけではなく、ジョージア、サウスカロライナまで広範な範囲で視界がとても悪かったと報道していたので、自分はその靄のなかをもがいていたということになる。なるほど、アメリカの靄は、靄が出るといっても範囲の大きさが違う。しかも、陸地ばかりではなく、海の方にもかなりの濃度の靄が発生しているのである。ずっと昔のことではあるが、学生時代に東京大学の海洋研究所が管理していた外洋海水研究のための調査船「白鳳丸」という船に乗り、アリューシャンにいったときに経験したことがあるが、海の上にも靄は発生するのだ。というわけで、これは、靄の発生メカニズムを調べないわけには行かない。

ところが、これが実際に調べてみてびっくり。実は、靄と霧は同じものだそうです。但し、視界が 1 キロ未満であれば霧と呼び、それ以上であると靄と呼ぶのだそうです。その発生のメカニズムは、大気中の水分が植物の蒸散が活発化するなどの要因によって増加し、

気温の低下などによって微粒子状(細かい水滴)となり、目に見える状態になるとのこと。日本では良く霧の発生は地形と関係があるとされ詳しい研究などがなされていますが、地形とは全く関係のない海の上での霧ということになるとこれでは説明がつきませんね。他の説明に、「昼と夜との気温差が大きい日に起こりやすい」となっています。とすれば、良く晴れた昼間気温が上がり、なにかの原因、つまり、気流の関係などで夜に冷気がやってくると海の上でも霧が発生するというわけですね。昼間、地表や海面が温められ、水分をたっぷり吸った空気が、夜に冷やされて水滴が凝縮し、これが霧となって浮遊しているということでしょうか。これなら、なんとなく理解できますが、さて、皆さんはいかがでしょうか。

そんなことを考えながら走っているとやがて、メキシコ湾を南に下がるころには次第に霧は晴れて広い海原をみることができるようになりました。雲は重く垂れ下がってはいるものの海を観賞するにはなんの支障もありません。そして、海岸線のすぐそばに公園のある Eastpoint と言う浜に着く。全くの偶然で此処にたちよったのだが、そこに建っていた看板を見て、ドキリ。なんと、なんと、この浜は、第二次世界大戦で、連合国に決定的な勝利をもたらす契機となったあのノルマンディー作戦、この作戦は、暗号で「D-Day」と呼ばれているが、その D-Day 作戦の上陸訓練が行われた浜辺とあった。こんな歴史のある浜辺であるが、そこは何気なく、こうした看板一つでその記憶を大事に残しておくあたりはアメリカ人の割り切りと歴史を大事にする国民という感じがした。この辺りの浜辺もやはり砂は細かく、粉と言う感じでざらざらした感じはなく、なにかおしろいの浜というイメージである。海岸近くまで行きメキシコ湾の小波に触れ、貝殻を手にいれた。ここの貝殻はフロリダで手にしたものよりやや大きめ。やったぜ、とやや得意げなポーズで写真を撮る。

この浜辺辺りから、西にずっと海岸線のドライブが続く。空には青空に見え始め、流れる白い雲を楽しみながらの走りが続く。ハイウェイのすぐ下に海が広がり、まさしく小波ハイウェイ。こんな素晴らしい景色が延々と続く。気分爽快。納得の浜辺ドライブ。どこまでも広がる海を見ながらのドライブはこれまで視たことがない。音痴でも誰も聞いていないのを幸いに、思わず、「琵琶湖周航の歌」など、鼻歌がでる。

やがて Panama City という町の近くになると、道路が整備され、海岸線には高層ビルが連なる。このあたりからレゾート開発が盛んに行われているもよう。フロリダの南の浜辺に決して負けないようなレジャータウンだ。なかには、海の中に直接建てられたようなマンションやお伽の国を思わせるようなホテルさえ見られる。楽しい限りである。

この辺りの砂浜も真っ白そのもの。時々見せる砂山は、まるで、あのドライレークでみたような塩でできた湖と同じ様な印象。当初は、これは塩の塊ではないかと錯覚したが、

実は、砂だった。アメリカの砂はどこにいってもこんな感じの粉浜か、という印象。

この日どうしても立ち寄りたかったのが、Fort Pickens. Pensacola という港湾都市の先の砂洲にある砦のあとだ。スペインがこの地を管轄していたときのメキシコ湾の重要な要塞であったことはたしか。National Park になっている。ということで、こだわったのだが、時間が遅すぎた。現地についたのはもうすでに薄暗くなりかけていた。ここは天気がよければ西に海が広がっているところなので絶好の夕陽を拝むポイントである。そんなことがあるのであろうか、私のほかに乗用車が一台。この時間にこの浜に来ていた。砦まではあるいてかなりあり、入り口はすでに閉鎖されている。でもこの車できた２人ずれ男女。もうかなりの年配である。夫婦にしてはどうもよそよそしい感じ。車から黙って降りるとそのまま、意思が通じているかのように二人で浜辺をどんどん海に向って歩いてゆく。暫し呆然のその後ろ姿を眺めていたが、２人の仲を邪推しながら写真を撮ったら、見事これがピンボケとなった。野暮なことを考えた報いか。

このあと、宿泊地の Mobile まで、夜道のインターステーツ 10 号を飛ばす。「夜霧の第二国道」というフランク永井の歌を歌いながら。今日も楽しいドライブの１日でした。

この日の発見。白い砂浜は塩ではなかった。

塩か? 否、そうじゃない貝なのだ。砂浜ではなく粉浜という感じ。

そうなんです。確かです。３度(サンド)ではなく、4 度確かめました。

誰かが、呼んどります。

この日の行程

Tampa --→ Brooksville --→ Crystal River --→ root 19 --→ Fanning Springs --→ Perry -→ root 98 --→ Medart -^-→ Terege ----→ Eastpoint ---→ Panama City --→ Fort Walton Beach --→ Pensacola -----→ Mobile (Alabama)

走行距離

537 miles

でした。

九日目　　モービルからリトルロックまで　　Dec. 30　2007

昨晩は猛烈な雷雨。天気予報では、この雨雲はルイジアナからジョージア、オハイオ、そして、東海岸まで伸びているとのこと。幸運にも、アラバマあたりは昼から晴れるという。ジャクソンにつく頃には晴れると予想していたら、全くそのとおりになった。これには少々脱帽。とにかくアメリカの天気予報はよく当たる。

ということで、この日の出発は雨。おかげで誇りだらけだった車がずいぶんきれいになった。昨日、ずいぶん車からの景色を楽しませてくれた 98 号線を今日は、モービルからジャクソンへの経路に走る。海岸沿いのこのルートのすばらしさは昨日の堪能で満足そのもの。ところが、これが内陸を走っているルートもこれまたすばらしい。アラバマの森林地帯のなかを、まるでインターステート並みの雰囲気で走ることができる。

そんなわけで、ついついぼけていたのか、赤信号を無視して交差点に突っ込んでしまう。信号が赤であることはわかっていたのだが、気のついたときが遅すぎた。横から信号が青で交差点に入ってくる車がある。がブレーキをかけてもとまらない。間に合わないのだ。しまった、ぶつかると思ったが、とっさにハンドル左にきり、左折をする。ちょうどよく対向車線には車が来ていなかったので、これで衝突を無事避けることができた。あのまま、突っ込んでいたら、猛烈な衝突事故になったことは間違いない。とんだ、冷や汗の一瞬。すこし疲れで頭がボーッとしていたのではないか。クワバラクワバラ。

こんなことがあったので、もう一度気を引き締めて運転。

ジャクソンにつくころには天気は最高。ほとんど雲ひとつない晴天域に入ったようだ。

ステーツ博物館に行ったら、あいにく年末の休みとか。たまたま横にパトカーが止まっていて、おまわりさんが今日はどこも休みだと説明してくれた。仕方なく、ステートハウスの前で記念写真。

ジャクソンからインターステーツ 20 を西に。ミシシッピーからルイジアナに入るところにミシシッピーのビジターセンターがある。ここは、ミシシッピー川を堪能する展望台といったところ。あとでルイジアナのビジターセンターに

もよったが、これと比較すると、拡張の高さが雲泥の差。とにかくセンターの中に入ると、まるで客間に入ったような雰囲気の部屋があり、ここにルイ王朝のころに使っていたのではと思うような家具が、平然と置かれているのである。格調高いソファーには誰でも腰掛けることができる。そして、サービスにコーヒーやらコーラを飲み放題というわけ。パンフレットも素晴らしいものが陳列されていて、みんながミシシッピーを楽しんでくれという調子。そんな、センターには展望台があり、ミシシッピー川を遠く眼下に見下ろすことができるようになっている。が、良く視れば、そのミシシッピー川に向けて、何筒もの大砲が設置されているのである。多分、かっては此処が要塞であったのであろう。川をさかのぼってやってくる敵を狙ったのであろうが、なんとなくこれが、対岸のルイジアナのほうに向かっているのがいささか気になるところ。いかにミシシッピー川から以西が、異郷の国であったかを思い起こさせる状況だ。

この展望台のすぐしたにミシシッピー川に鉄橋がかかっている。車の通る橋のほかに、鉄道用と、その鉄道の横には歩行者用の橋がある。ここから、川に向かって大砲が備え付けられている。ちょうど、鉄橋を列車が渡ってやってきた。よいイミング。ところがこの貨物列車の運転手がなかなか愛嬌のある人。鉄橋で汽笛を鳴らしていたので、必死に写真を取りながら手を振ったら、今度は、汽笛でその返事をしてきた。こんなユーモアがアメリカ人にはある。とても気分を良くした。

ルイジアナに入り、ミシシッピー川に沿って北上。地図をみるとこの辺りミシシッピー川の流がどこにあるのか検討が着かないくらい複雑だ。流域にはかってミシシッピー川が蛇行しながら流れていたものが、洪水の度に川の流れが変わり湖となったものがたくさん並んでいる。ここが、ウォーターレゾートになり、レジャーの拠点となっている。ちょっとした町になると川沿いの庭にボートの桟橋をもったうちが延々と続く。アメリカ人は、釣りやボート遊びが好きだ。それに、最近ではジェットスキーがとても早っている。おかげでホンダのみならず、ヤマハ、カワサキ向けなどに当社が生産しているジェットスキー用のシートもなかなか売れ行きが好調のようである。

やがて、このハイウェイはアーカンソーに入るが、この辺りはミシシッピー川がもたらしてくれた肥沃な土地が果てしなく続いている。その農場の大きい

こと。途轍もない広さだ。とにかく、農家がなかなか見当たらないのである。ハイウェイの両側に農場が開けているが、片方の畑には緑の絨毯を敷き詰めたように葉っぱがでているのに、もう一方は、茶色の土の地肌である。作物を作っているのは、道の両側に広がる畑のその片方だけ。これは多分、毎年、交互に右と左を耕しているのではないかと思う。農場が広すぎて手が回らないのだろう。

Lake Chicot という三日月湖の脇の Lake Village というところにあったビジターセンター。ここが、湖の上にある建物でなかなか粋なつくり。そのビジターセンターの留守をしていた人。この人は男の人であったが、まことに愛嬌良く、また、サービス精神満点。いつもなら、ビジターセンターでサインをして資料をもらうのだが、この人、サインの要求などせず、インタビュー形式で、どこから来たのか、何人のグループか、今日はどこに泊まるのかなど、次々質問してきて、それをこまめにノートし。「はい、此処に資料が一式あります。」という感じで、こちらが欲しいものをまとめて袋に入れてくれた。こんなサービスは初めてと感心。いろいろな場所を旅している人には、彼の印象はとても素晴らしく、アーカンソーの楽しい思い出の一つになるのではないかと思う。すぐ後から入ってきた人たち。話を聞けば、フロリダから一家、車二台でやって来たという。今日の泊まりは、Hot Springs だと言っていた。私も明日、そこを通るつもりだといったが、なんと、この人たちが泊まるという Hot Springs がアメリカ人たちにとても人気のある場所だということが、次の日に行ってみて初めて分った。

この日の行程

Mobile --→ root 98 --→ (Mississippi) --→ Hattiesburg --→ Jackson -→ root 20 --→ Vicksburg --→ Tallulah(Louisiana) --→ Lake Providence --→ Lake village (Arkansas) ---→ Dumas --→ Pine Bluff --→ Little Rock

走行距離

467mile でした。

十日目　　リトル・ロックからウィチタまで　　**Dec. 31 2007**

とうとう、この旅も残すところ後二日となりました。ここまでくるともう帰りの旅ということで、予定のほうはいまいちという感じでしたが、とんでもない、この日一日とても充実した行程となりました。その手始めは、ホットスプリングの町。リトルロックから 1 時間ほど西に行ったところにある町。

話によれば、昨年というか 2007 年には、175 周年の祝賀祭りをしたという此処、ホットスプリングスはナショナルパークはアメリカで一番古く、そして、

また、一番小さいのだそうだ。なんとここの温水は、4000 年の前に此処に西に広がる OUACHITA の森に降った雨が地下に浸透し、地熱で過熱されたものがホットスプリングスの町で勢い良く湧き出ているということが放射性炭素の測定により確認されていると言うから驚き。毎日華氏で 143 度、摂氏にすれば、61 度くらいか、その温水が 100 万ガロン近く湧き出ているとのこと。町の至る所に白煙が立ち、豊富な湯が湧き出ているのです。ダウンタウンには無料の公共温泉があり、一般の人々の飲料水としても利用されているらしい。どこの国も温泉はリラックス効果や快適さを与えてくれるというので大人気の場所とか。長期の滞在をする人のために町には様々な文化施設があり、単なる治療のためにだけでここを訪れるというものではないらしい。そういえば、昨日、レイク・プロビデンスでであったフロリダから来ていた家族はここで正月を迎えるということだった。なんと贅沢なことかということが町の様子を見てこれでわかった。

そして、驚くことなかれ、こここそ、話題に事欠かない元大統領クリントンの出身地だったのです。

このホット・スプリングから 270 号線を西に走る。そして、Talimena のシーニックドライブウェイに向う。つまり、オクラホマの Talihina と言う町から、アーカンソーの Mena と言う町まで走っている山岳ハイウェイだ。ここは以前に春に走ったことがあるが、今回はその時とは逆のコース。道の両脇には雪がある。さしずめ、南の方の人なら、雪の山道をドライブしてきたと話の種になるところだが、考えてみればネブラスカに帰って、雪道ドライブなど何の興味の対象にもならない。まあ、そんなことはどうでも良く、この山道、とにかく両脇が

崖という、山の尾根伝いにつくられたもの。カーブは勿論、アップアンドダウンも自然の地形そのままだから変化に富んでいる。ここを 100 キロでとばす。そして、すでに落葉した木々の間に見える眼下の広大な景色。これがなんとも素晴らしい。いたるところにビスタポイント、つまり展望台があり、そのたびに車を止めて、自分の眼前に広がる眺望を視たくなる。真冬の北風は頬に冷たかったがその都度記念撮影。まあ、ここは下手の説明をするより、とにかく一度いって御覧なさいと言いたいドライブコースである。

アーカンソーからオクラホマに入る境界にはちょっとした広場がある。ここに看板があるので記念にと一枚。その脇に、こども連れのパーティーがこれから山を下るということで、谷に下りていった。車はそのまま此処において、後で取りに来るらしい。下りだけを利用して山岳探索をし、自然のなかで野生の動物達に遭遇し、草花を勉強し、そして、森林の綺麗な空気を一杯吸い込んで、英気をやしなっていく、そんな遊び方がアメリカの人たちは非常に上手なようだ。彼らに分かれたあと、こちらは、再び、山岳ドライブ。ここからは、やや下り坂であるが前方には、どこまで見渡せるのか分らないが、視野が視力の届く限り遠くまで広がっている。ここからみれば、オクラホマの大平原を越えて、この向こうのテキサスの山々まで見えるような気になった。とにかく、アメリカの大地の広さが見下ろすことのできるのはここ以外にはないのではないか。そんな気がした。

期待していた以上の山岳ドライブとなり、気持ちよくなって McAlester という町に入り、ここからターンパイクを飛ばす。コースは、Tulsa という町、この辺り、Osage インディアンの居留地となっているところで、沢山のインディアンの博物館がある地域。そのいずれかに立ち寄るつもりでいたが、年末でどこもクローズの可能性が高い。それに、山道ドライブを楽しみすぎて、時間が大分予定より遅れた。そんなわけで、ここは、高速を利用してオクラホマにいき、ステーツキャピタルハウスを見て、この日の宿泊地カンザスのウィチタに行こうと計画変更。まあ、ターンパイクとインターステーツなら時間が読めるし、暗くなっても運転は安心というところ。そのターンパイク、なにしろ、制限速度 75MILES。これなら安心と、80 マイルで飛ばしていた。そして、これがインターステーツに繋がる 12 マイル前で終わる。こちらは、そのまま制限速度が 75mile と思ってスピードを落とさずいい気分で運転していた。ところが、ターンパイクを出たところにパトカーが見張っていたのである。インターステーツに入るところで何の気なしにバックミラーを見たら、なにやらあの派手なランプを点

灯しているパトカーがすぐ後ろにつけているではないか。こちらは、五マイル程度のスピードオーバーだからつかまる筈はないと思っていたのだが。そういえば、ターンパイクを出たときに、自分の前にいたピックアップトラックが急にスピードを落とし、私はこのトラックを追い抜いてきたのだ。これで、つかまる。きたねぇーよという感じがしたが、逆らってはなにをされるかわからない。取り調べを受けると、まず免許を見せろという。ネブラスカの免許証を出すと、誰の車かと尋ねてきた。「カンパニーカーだ。」というと、直ぐにパトカーに戻り、無線でなにやら確認している様子。暫くして戻ってきた警官が、此処にサインしろという。そして、結局、「今回は、ワーニングです。あなたは 81mile でした。気をつけて運転してください。」と言って無罪放免。ああ、考えて見れば、ここは、インターステーツ 40 号、そういえば、アリゾナで 90mile を出してスピード違反で捕まったのも、インターステーツ 40 だった。この 40 号、チョっと　験が悪い。そんなことを考えながら、オクラホマシティーに到着。ここでキャピタルハウスによる予定。だが、この町、やたらと大きい。と思ったら、人口は 53 万人とか。リンカーンが小さすぎたのである。遠くから見ている時にはステーツハウスが分ったのだが、ダウンタウンに下りた途端に見失ってしまった。随分日も暮れ、辺りは薄暗くなっている。ここで時間をついやしてはならずと少々の焦りあり。そんなわけで、折角のナビがありながら、とうとう、たどり着くことができず断念。これからウィチタに向うには時間が時間だけにかなり遅くなってしまうのだ。

まあ、今日一日、楽しかった山岳ドライブと、おまけ着きのパトカー事件。運良く無罪放免となったので、今夜はユックリ寝られるだろう。

この日の行程

Little Rock --→ Hot Springs --→ Mount Ide --→ Norman --→ Big Fork --→ Mena -→ root 8 --→ Talihina (Oklahoma) --→ Lutie --→ McAlester ---→ Henryetta --→ Oklahoma City --→ root 35 --→ Wichita (Kansas)

走行距離

564 miles

十一日目　　**Jan.　01　　2008**

ウィチタからリンカーンまで

いよいよ最後の日。やや疲れ気味であるが、予定通り 7 時に出発。ただし、ウィチタの気温がマイナスだったと知り、ややゆっくり目とした。とにかく寒い。予定ではまっすぐリンカーンに戻るつもりであったが、せっかくのこともあり、トペカに回り、キャピタルハウスを見学することにした。と言ってもこの日は元旦。どこもお休み。本来なら仲間で見学できるのだが、外で記念写真を撮るためだけに行くのである。カンザスからトペカを通りウィチタに通じているターンパイクをつっ走る。雪の季節はこうした主要の道路の方が車がよく走っているので安全なのだ。気温は零下であるが道路は凍結していない。

とにかく大平原のなかを走るこの高速。有料ではあるが、周りの景色がすばらしい。数 mile も真っ直ぐな道路とどこまでも地平線が続く景色が続いたりでついつい気分が大きくなり、スピードがでてしまう。ターンパイクにはサービスエリアというのがある。インターステーツではガソリンの補給には高速を降りてすればよいが、ここは有料道路だから、インターステーツのように何度でも乗り降りができるというものではない。それだけに決まった間隔でこうしたサービスエリアがあり、簡単な食事、といってもどこもマクドナルドが主役であるが、それと、ガソリンスタンドがある。高速だから特に高くなっているということもないので、気安くの補給ができるというわけ。とにかく運転が単純であるので、此処で一休みするのが、一人旅の気晴らし。とばかり、Emporia というところで車を止め、広大な景色を楽しむ。アメリカが広いとはいえ、此処のように 360 度地平線というのは、珍しい。かっては、オサゲ族というインディアンがこの辺りに居住していたのだろうが、この広さのなか、彼らはどんな風にして獲物を追いかけていたのだろうか。あの地平線の果てまでいっても、またそこから次の地平線まで、平原が続いているのである。

実は昨日、オクラホマでもやはりキャピタルハウスに行くつもりでいたが、すぐ近くまで行きながら、すこし時間が遅くなり気の焦りもあってとうとう見つけ出すことができなかった。が、トペカでは町に入る前に遥か手前手で高速

から見つけることができ、ナビのお蔭でハウスのまん前まで無事到着。ご機嫌に写真を撮る。勿論、元旦ということで人影はほとんどなく、駐車もし放題であったが、どこでチェックをされているかわからない。前科もあるので、ここはしっかりと料金を支払う。アメリカではすべて自己管理。他人が見ていようが、管理をされていなかろうが、自分で判断して間違いないようにしなければならない。後でどんなペナルティーがくるか分らないのである。実は、この自動の料金の支払いの方法がよくわからず、ついつい違法駐車をすることがあるが、今回のドライブで何度か挑戦、どうにかこの仕組みが理解できたというわけ。駐車場に立っている料金支払のポールにクォーターを入れれば、残りの駐車の時間が表示されるということのようだ。場所により１クォーターで駐車できる時間が変わるようだが、とにかく入れれば、どれだけ駐車できるかが分るというもの。時間が足りなければ何枚でも入れればよいが、ダウンタウンでは最長の時間が決められているのでむやみやたらに駐車していることはできない。それにしてもこうしたパブリックの駐車場に止める限りはたいした金額ではないのである。

南北戦争時代に、南部に加担した政府に対抗し、北軍を指示する人たちが別に州都としたのがトペカのようだ。トペカの町がどのように発展したかは調べないと分らないが、この町、とりわけステーツハウスの回りには立派な教会が幾つも建っている。これはアメリカのどこの町に行っても驚かされることであるが、その町の発展にこうした宗教の力、というより、入植した西洋人たちは開拓が厳しければ厳しいほど、また、自然が厳しければ厳しいほど、精神的な安らぎを求めてこうした教会を頼ったのではないかと思う。また、こうした教会は、インディアンに対抗するための砦であったことも事実のようだ。だから、町の中心に広大な敷地をもった教会が今でも残っているということなのだろう。そんな気持ちで、いくつかの教会の写真を撮る。

トペカから 75 号線を北上。途中、Potawatomi、Kickapoo と言うインディアンの保護居留区をとおる。と言うことは、このあたり土地があまり肥沃ではないということ。其れでも、広大に開けた平原は雪の原。これがすごい。風をさえぎる林などというものがないから、この雪原から粉雪が道路のところどころに雲のように流れている。乾いた道路はそこだけが黒く光っており、なんとなく凍結しているのではという感じ。しかし、実際は車のタイヤのあとが残ってい

るだけで凍ってはいないようだ。そんな感覚が何度かここを通過するたびに確実になってきて、速度も 60mile を平気でキープする。ところが、Fairview という町から 36 号を西に向かう。大分北に来ているので、雪の降り方が激しかったようだ。メアリーズビルまで、これまた雪の量が多く、今度は、短い区間ではあるが、たまに凍結しているところもあるようだ。それでも、道路が真っ直ぐであるのでハンドルをしっかり握って勢いで通過してしまう。45miles の区間であったが、慎重に慎重にドライブ。外の温度は 19°F まで下がっている。摂氏でマイナス五度ぐらいか。昼間気温が上がり雪が融けるとこれが夜凍るので恐いが、こちらでは生活道路は必ず整備がされているので、その点では安心できる。昨年は、雪のなかの帰りドライブでスリップして車が半回転するというトラブルがあった。こうなると折角の旅の思い出も台無し。と言うわけで、今回は次々のピックアップのトラックに追い抜かれながらも安全運転第一をこころがけ、無事、リンカーンに帰着。

こうして、11 日間という長いアメリカ南端までの旅が終了。沢山の思い出と、そして、長旅を支えてくれた愛車ホンダアコードに感謝しつつ、懐かしのアパートに。ちなみに今回のドライブ走った距離は、なんと 4860 マイルでした。なんと、7800 ｷﾛ。よく走りました。

この日の行程

Wichita --→ Topeka --→ root 75 --→ Fairview -→ Seneca --→ Merysville --→ Wymore (Nebraska) --→ Beatrice --→ Lincoln

走った距離

334 miles

反省編

今回の長旅。一番の反省は、すこし無理をしすぎたと言う感じ。毎日 400～500mile も運転をしていますと、体の疲れもさることながら、頭の方の緊張もややたるみがち。おかげでヒヤリとしたこともあり、これからは、数日の運転のあとは中休みが必要と感じた。

途中で、ここまでせっかく来たのだからとついつい慾がでて車を止め、写真をとり、資料をもらう。こんなことを繰り返していると僅かの停車時間でも、回数により、すぐ 1 時間や二時間は時間をオーバーしてしまう。夕方になると時間がなくなり、気分的に焦りが出てくる。これも隠れた危険要素。冬のドライブということで、毎日 16 時には、モーテルに着くように計画していたのだが、大体、18 時過ぎになっていた。

これまでは、カウンティのハイウェイを走っていても時間を読むことができたが、しかし、フロリダはそういうわけには行かなかった。とにかく、人、車が多い。片側四車線の高速でも、車がびっしり。車線を変えるのもなかなか難しい。アメリカ人はそんななか、ちょっとの間隙を縫って車線の変更を一揆にやる。その時にスピードを落とさず、自分で追い抜いていく感じでやる。これが、まるで、NAS CAR のレースを見ているよう。以外と彼らは自分が NAS CAR のレーサーになったような気分でいるのではないかと思う。

朝は西に、夕方は東にというのが、運転しやすい。こちらは朝日、夕陽の太陽は地平線まで落ちてくる。また、道路は真東、真西にとなっているところが多いので、ドライブのコースを決める時には、その時間に太陽の位置がどこにあるのかをよく調べて決めるのがよいだろう。ちなみに朝道路の下から太陽が上がってくるときなど、全く前が見えない状態で運転することになる。こんなときには車を止めてすこし時間を取るのがよいかもしれない。

また、道路の両側の景色を楽しむときにも、運転席側に景色を楽しむことができるようなコースの取り方をすると良い。ちょっと難しいかもしれないが、予め地図をみて、どちら側の景色をおもに見たいのかを決めておけば、大事な時間を有効に使うことができる。